

[インタビュー]

書店の眼で見た現代中国文学の動き

——満江紅・大山茂氏に聞く

中国文学の四つの時期

——四人組問題以降、中国文学界にも最近新しい動きが出てきたようですが、出版情况等からめてお話しください。

大山 中国のこれからの出版方針については、去年の10月28日付『人民日報』に載った国家出版局理論組の論文（「毛沢東思想にみちびかれて真剣に出版工作をやりとげよう」、『中国研究月報』1977年12月訳載）と、今年1月12日付『人民日報』の“全国出版工作座談会”開催の報道記事を、ぜひ参照してほしい。

中国の文学作品をふりかえってみると、これまでの時期を四つに分けてみることができる。一番目は1919年五・四運動以後の作家とその作品、魯迅をはじめ巴金、老舍、茅盾等がよく知られている。二番目は1942年「文芸講話」以後のもの。『林海雪原』（曲波）、『暴風驟雨』（周立波）、『呂梁英雄伝』（馬烽）、それに『青春之歌』（楊沫）や『紅岩』（羅広斌、楊益言）、『新儿女英雄伝』（袁静等）、『野火春風闖古城』（李英儒）などがこのなかにいる。三番目は建国以後、文革前の作品で、『風雪之夜』（王汶石）、『光輝的里程』（杜鵬程）、『李双双小伝』（李准）など各種の中・短篇小説や、長篇の現代歴史小説『創業史』（柳青）などが、このなかにいる。四番目が文革後、現在に至るまでのもので浩然の『艷陽天』『金光大道』など一連の大作ものや張天民の『創業』などが含まれる。

——最近出版された本の中で、『李自成』のような歴史小説が中国の人たちの間で人気を呼んでい

るそうですね。新華書店に行列ができたり、なかには書き写して読んだりなんて話も聞きますが。

大山 『李自成』の作者・姚雪垠^{ようせつぎん}については外国ではよく知られていないが、司馬遼太郎や海音寺潮五郎みたいな歴史文献を丹念に調べて書き上げるタイプの人で、年代的には旧時代の知識人といえるでしょうね。こういうもので歴史の理解を深めることも大切です。解放後、こういう歴史小説はあまり例がないですね。

この作品にも毛主席は非常に関心を寄せていたことが最初にお話しした『人民日報』の国家出版局理論組の論文でもふれられています。歴史といえば、二十四史の標点本の出版を思い出す。四人組式に言えば、あんなものは封建時代の御用学者の書いたものだから必要ないとでも決めつけられそうだが、毛沢東はなぜこの膨大な歴史書が長い間使われてきたか重視しなければならないとって、初めて体系的に読みやすい形にして出版させた。こういう作業は建国後の若い人たちにはなかなかできないので、解放前の古い知識人に積極的に参加させた。こうすることで彼らにも新しい社会に自分たちも奉仕できるんだという生き甲斐を与えると同時に、文化的、政治的にもこうした立派な事業を有効に役立てた。こういう点にも毛沢東の偉大さがあると思う。その点、日本の政治家には文化は全然ダメという人が多い。

目標に役立てるための出版

——中国の人たちにとって、本は高価なものなのでしょうか？

大山 値段が高くて買えないというのではなく、

人気のあるものなど一時的に数が間に合わなくなるといことです。出版も下部からの意見を汲み上げつつ計画的にやっているの、膨大なストックをつくらぬために控目に出すと、人気が出た本が売り切れてしまうことがある。あれだけ広くて人口の多い国では、出版も需給のバランスをとるのはたいへんなんですね。日本だと売れる本は同じような企画であちこちの出版社が出す。売れないときは出版社がつぶれるという形でケリがつくけれども、むこうではそういうケリのつけ方は許されませんか。

前に話をした座談会の記事には、1.労働兵のため、2.社会主義革命と建設のため、3.四つの現代化のためという目標に役立てるための出版をしていく予定だということで、1985年までの構想を出しあったと書かれています。

それから、古い本を出版する場合でも、中国ではそれを無批判に出すわけじゃない。ちゃんと読書指導にも力を入れている。前書きや後書きを入れたりして。それについてはこんな話が去年の秋の『人民日報』に紹介された。貴州省のある中学で、国語の先生が杜甫の詩を教えようとした。それまで毛主席の詩などを教えているうちは問題なかったが、杜甫のような古典詩をやろうとしたら、学生だけでなく教師の間でも「当然古典としてやるべきだ」という意見と、「そんな古い封建時代のもんはやる必要ない」という賛否両論が出た。つまり文革後育った若い教師や生徒と、文革前の教師との間に評価が分れた。それが『人民日報』の投書欄で紹介された。すると首都北京の中国社会科学院文学研究所の一担当者が、それを取り上げてこう回答した。それは杜甫の作品がどういう歴史的、社会的、文化的意義をもつかを充分踏まえたうえで、当然やるべきだということです。われわれから見れば中国人でありながら李白や杜甫も知らないその方が不思議なくらいだが、事実こんなこともあるわけです。

チャップリンの死を『人民日報』も写真入りで報道したが、文革前に『チャップリン伝』が出たことがあるんですよ。チャップリンは中国語では「卓別林（麟）」と書く。世界中の人たちがチャップリンといえは子供でも知っているのに、中国のひとたちは知らないなんて世代が出てくるようでは大変ですからね。毛主席の「昔のものを今に役立て、外国のものを中国に役立てる」ということばは、そういう意味でたいへん重要です。

日本における中国書籍

——中国書籍の日本における読者層、売れ行きはどうですか？

大山 中国側の今いったような重要な観点が、そのまま日本に反映するかというとそうでもない。一般的にいうと、しよせん体制の違う外国という前提がある。だから実用書、特に語学関係や初学者向けの読みものがよく売れる。去年中国では毛主席や周恩来、朱徳等と一連のひとたちの追悼文集や回想録が出版されたが、これが日本で一定の固い読者層を形成するには時間がかかることです。中国の古い文化になじみがあるだけに、依然唐時代の古い詩なんかに興味をもたれる。『紅岩』や『青春之歌』も以後読んだり聞いたりした人が今度の再版を機になつかしくなって買っていくことが多い。現在の日本人民の社会生活やたにかいに共通の感情があるからでしょう。

日本人の感情にピッタリくる時期としては、やはり魯迅そして老舎や巴金のような作家、30年代の都会生活を描いたような作品が親しまれやすい。だから大学の中国文学作品の教育・研究は、このへんを対象にしたものが多い。しかし、日本の広範な大衆も、幾度の闘争を経験してきているから、前にあげた最近の各種重版本はじっくり腰をおちつけて読むと共感する面が多いはずですよ。

〔各書店への読者層、よく売れるジャンルについてのインタビュー——内山書店：読者層に年令

差はなく、著作者の有名度で売れている。最近出た陳毅、董必武、朱徳ら古くからの中国革命の指導者であった人の詩、あるいは郭沫若『女神』、『李白与杜甫』は比較的良好に売れた方であるが、詩では現代詩は特に売れないもの。同じ中国語の新刊・再版でも香港のものより北京で出版されたものに人気があり、専門家などは以前買った本でも新版で出るとまた買っていく。概して客にマスコミの影響が強いようだ。亜東書店（東京）：売れ行きのよいのは社会科学、次に文学のジャンルということになる。「左翼的文献」は最近あまり売れない。四人組問題による売れ行き、あるいは読者層の変化というものは、特にないらしい。中華書店（東京）：文学作品の売れ行きは芳しくなくストックを増やしていくようなもの、という。売れ行きのいいものとしては、1.語学関係、2.辞典類、3.実用書ということになり、最近『四人幫事件探索』（齊辛、七十年代社）、『四人幫言行録』（文化資料供給社）のような四人組批判の解説・資料的なものがよく出る。顧客層としては華僑、熱心な層としては戦前・戦時に中国に住んでいたたり何らかの関係を持っていた中高年層があり、現今の中国の様子を知ろうとよく勉強している。その反面、学生はあまり勉強せず、学校で中国語を学んでも中国語の小説を読破しようなどという大志をもつ学生は少ない。東方書店（東京）：ジャンル別に一番よく売れるものとしては、文学関係というよりは社会科学一般ということになる。その他に『大唐西域記』『中国近代史』などの歴史ものあるいは『現代漢語詞典』などの売れ行きも見のがせない。——以上のように各書店少しずつ違う面はあるが共通した傾向はうかがえる。]

——読者にはどういうもの、中国の小説の中でどんな作品に人気がありますか？

大山 そうですね、東方書店の文学シリーズや青

年出版社の訳本類もだいたい建国後の新しい作品が多いですね。『文芸講話』や五・四以降にまたがるものには河出書房や平凡社の選集ものがあるが、原書で買って読む読者は正直いってまだ少ない。それに教師の関心や積極性がないと学生も何を読んでいいかわからない、せいぜいニュース種で関心がある程度というのが多い。それでも『紅岩』や『青春之歌』は原書でもよく読まれた部類。（店頭を見渡ししながら）『艷陽天』『金光大道』『沸騰的群山』も売れゆきのいい方。

〔各書店インタビュー——内山書店では最近のベストセラーとして『李自成』（第一巻）『子夜』『家』『青春之歌』『紅岩』があげられ、少しさかのぼり『海島女民兵』『沸騰的群山』等も比較的良好に売れた方とのこと。特に文革後の文芸作品の中では浩然がよく売れたという。四人組打倒後76年半ばから77年前半にかけては空白状態が続き、その後『青春の歌』をはじめ文革前の有名作家が出てきたので、パターン化されぬ内容と読ませる文章ということでか、今までの部数では間に合わぬ程の売れ行きという。中華書店（東京）では再版もので『青春之歌』『紅岩』『林海雪原』、亜東書店（東京）は『紅岩』『青春之歌』『暴風驟雨』等で再版ものの売れ行きは今までの倍位とのこと。東方書店（東京）も『青春之歌』『紅岩』『李自成』という具合で、全般的に顔ぶれはかなり定まってくるようだ。〕

「三突出」とシラケムード

——中国語を勉強して、さてどういうものを読んだらいいかと迷うものが多いが？ 私たちも中国語研修学校の文化祭で『決裂』を劇でやったんですが、あの頃は「はだしの医者」を扱った『春苗』だとか、いろいろ新生事物を描いた作品が出てきましたよね。ところが、そういうものが今は批判的な眼で見られるかと思うと、同じ頃上映された

『創業』は非常にいいといった調子で、受け取り手の方でも当惑してしまうような……。

大山 それについては、せっかく四人組時代に「これは」と思って読んだ本が、今は批判の対象になったりするから、「こりゃどうも信用できない」という一種のシラケムードが出てくる。そこで中国の作品は慎重に手控えるといった風潮で、中国の小説に飛びつかない条件にもなっているようだ。これは外国人である日本の読者として、能力や時間的ゆとりから言ってやむを得ないことではあるのだが……。

もう一つ突っ込んで言うと、解放前の中国の方がわれわれ日本人にとっては生活感情が通じやすいが、解放後の社会主義中国は、よほどよく学習していないと、社会体制の違いから感情面で異質な感じがするということもある。そこへもってきて四人組の「歪曲」したものがからんでくる。抑揚・ヤマをつくって対立物も鮮明な彼らの手法に引きつけられて見ているうちに、その奥にある彼らのつくった人脈で、実はこういうことを当てこすっていたということが後になって分る。そのへんのむずかしさですね。なにしろ外国人の眼では、そこまで見抜けない。だから、むしろ巴金や茅盾といった旧社会の矛盾を描いたような作家が依然読まれている。抗日戦をテーマにしたものも日本人と接点があるから読まれるだろう。

——『林海雪原』からつくられた『智取威虎山』を、江青がさらに改悪しようとしたなんてことはあまり日本の読者には知られてないんですね。

大山 最近の作品を判断するポイントの一つに、四人組の出した「三突出」の理論というのがある。四人組時代にはやたらに敵対者を多くして、知識分子まで「九番目の鼻つまみもの」といわれてダメな部類にされてしまった。彼らの文芸理論にしたがえば、テーマはまず革命的人物に取材し（第一の突出）、その中でも英雄的部分をもう一つ突出し（第二の突出）、三番目にはさらにそこから

一人の典型的な完全無欠の英雄を突出するという「三突出」でなければならないというわけ。これは彼ら自身を英雄になぞらえ、その他をひき立て役にしてしまう意図があった。比較的最近『白求恩在中国』（中国のベチューン）という物語が出版されたが、これを見ると最初プロレタリア国際主義の立場で中国にやってきたベチューンが、中国人の助手と一緒に仕事をやるのだが、彼らの医術にたいする無智に失望したベチューンは彼らを排除しようとする。ところが彼らのひたむきな熱意に感動したベチューン自身が、逆に彼らのその精神に学び、再び共に仕事に励むようになるというシーンがある。これなどベチューンは偉大な英雄だが、最初から完全無欠だったわけじゃなく、彼をそうさせた背景には解放をめざすたくさんの無名の人々がいたということを描こうとしているから、四人組の「三突出」とは明らかに違う。これからの作品を見ていくにも、このへんが一つの手がかりとなるでしょう。

——読書会で『金光大道』やいくつかの小説を読んだが、また“上山下郷”運動とはどういうものか小説を通して知りたいということから『征途』を読んだところ、英雄的な主人公が「こうあらねばならない」といった調子で描かれているんです。青年が農村で試行錯誤する姿が実感として伝わってこない。素材は実話から取材していても、頭の中で組み立てられた感じなんです。実際の生身の生活に照らして、果たしてこうしたものが中国の人たちに本当によろこばれているのかという疑問が出たんですね。その時はまだ四人組の問題がはっきり表面に出てくる少し前でしたが。

大山 『林海雪原』も『智取威虎山』に改編されると楊子榮一人で何もかも動いているようなとりあげ方になる。ブルジョア文学ではよく超人的主人公一人を突出させる。たしかに民衆の願望としてはそういうものがあるが、底辺にある人民大衆の力が英雄を育て、歴史を創造するのだという考

えを見失うと、人民大衆は全くの烏合の衆になってしまう。

——原作の『林海雪原』では作者の曲波自身が物語に登場したり、とても素晴らしい同志の何人かが途中で殺されてしまったり、筋にも厚みがありますね。『智取威虎山』はあれなりにいいとしても、江青たちはそれをさらに改悪しようとしたわけでしょ、そこまでくると人民の生活のニオイはもう消え去られてしまいますね。

大山 一方、文革前のことですが、中間人物論というのが問題になった。たしかに人間は完全でないから、当然中間人物もなければおかしい。しかしそれをいいことに中間人物にのみ重点を置いて、多くの人民大衆を忘れてしまう傾向が強くなると、これは結局ブルジョア思想ですね。

期待される业余作家

——中国語を比較的勉強している人でも、中国の小説は最初は読めば結末はわかっちゃうからつまらないとか、中国の作家が失脚したり復したりするのは作品自体の是非でなく、政治的人脈が背景にあるからだという意見もあります……。

大山 人脈論というのは見当違いでしょうね。それはたまたま四人組の場合そうだったということです。文革前から业余作家の出現により一般労働者の中から作家が育っていく形態が発展してきた。これは、毛沢東の文芸路線が主要な位置を占めていたことの一つの証拠です。

茹志鵲という女性作家を知っていますか？ 上海の工場労働者出身で、业余作家からきたひとで文革前にも作品が紹介されました。そして『新しい人間像』という作品が外文出版社から日本語版で出版されたことのある胡万春という人。本来はこういうひとたちの後から、どんどん立派な业余作家が出てくる必要があった。たしかに創作技術上の未熟さがあります。面白さに欠けるという点は、これからの課題ですね。

最近中国から帰ってきた人の話によると、若い世代の业余作家で、話の筋と結末さえ定めてくれたら、あとはそれにそった物語をかくというものがいるということです。しかしこれでは自分たちが本当に創作しようという能動的な姿勢が失われて、受け身になってしまう。そんな創作態度が涵み着いてしまったら业余作家が画一化してしまう。

〔内山書店の場合：业余作家の作品が多く出されたが、内容のパターン化、文体の未熟さ、用語の難渋等のためあまり売れなかった、読者が選んで買うようになったためと考えられる、という。そうした文革後の文芸作品の枯渇状態の中で浩然が出てきたため日本の読者もとびつき、今から見れば想像できぬほど売れたという。〕

百花齊放、百家争鳴ということ

——これから中国の文学作品を読もうというひとにひとことアドバイスを。

大山 それはむずかしいですね。私自身がよく読んでいないと。ただ従来から中国でも日本でもそれなりに名も知られ、親しまれてきたものは手にとってみるべきだし、何よりも自分の頭で考え、よく噛みわけることが大切。それには「新民主主義論」「延安文芸講話」「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」など、文化ないし文学芸術に関係のある毛主席の重要な著作を、この機会にあらためて読みなおしていただくことを是非おすすめしたい。中国という外国のことを理解するのに、一部の盲従や一時的シラケをのりこえて、できるだけ正確な認識をもてるようになるには、一定の時間をかけなければならない。今は四人組によって押さえられていた本の再版や新刊が入ってきてるわけですから、「百花齊放、百家争鳴」による新しい文学が出てくるのはこれからじゃないですか。去年の11月号の『人民文学』に出た「班主任」（担任教師）という短編などは、扱っている主題といい、筋のはこびかたといい、表現方法

といいこれまでの小説と違った傾向を示すものとして注目できる。ぼつぼつそうした新しい文学作品の兆が出てきています。

——日本人には同じ中国のことを書いたものでもスノーやスメドレーのような外国人の書いたルポルタージュがよく読まれているが、どうしてでしょうか？

大山 それはちっとも不思議じゃない。事実の一つしかないが、その感じ方や受け取り方が社会体制の違う中国人の書いたものより、スノーやスメドレーのような外国人の書いたものの方が感覚的にも日本人には受け取りやすい、つまり感覚的に近いということがある。それにしても日本にはスノーやスメドレーみたいな人は出てこないですね。——彼らは社会体制や人種・風俗の違いなどを噛み砕いてくれるような……。

大山 違う見解がスパッと出たりする。実はこれが必要な過程なんです。日本人の場合、もの分りがよすぎて、すぐに未消化でものみこんでしまう。これが長い目でみるとマイナスなんです。やっぱり自分の頭で考えることが必要、ウケウリはダメですね。

——日本における中国語関係の読書グループやサークルなどはいかがですか？

大山 「中国児童文学研究会」とか「魯迅友の会」などは知っているが、若いひとたちの中から湧き上るような動きはまだ少ない。民間の語学教育という面では中国語は他の外国語より根を下しているのだが、それがすぐ作品の学習や研究のグループには結びついていない。むしろ、四人組問題があってから本当の中国研究はこれからといい気が強くする。

そうでなくても中国が変質することへの「期待と願望」をともなったマスコミによって、曲げられることが多いのだから、本物を知り、考え、紹介していく基礎的作業はますます必要になる。これはこういうものだよ、と最初から決めつけたんで

は、それから一步も動きがとれなくなる。基本をおさえたら、あとは開放する、そしてほんとうによいものは、その中からきたえあげられていく。「百花齊放・百家争鳴」というのはそういうことなんですね。みなさんの若い力でがんばってもらいたいものです。

(文責・加賀美徹也)

(付訳)

神田・すずらん通り周辺を私たちが訪れたのは、まだ春は名のための2月上旬であった。一・七訳社の大友、加賀美、内海、芝、小暮、東、中古、および『人民文学』を読む会の谷部、喜多山と中研事務局の編集担当者が個々に2～3人で、満江紅、内山、東方、中華、亜東、燎原の名中国書籍専門店と青年出版社を訪ねた時には、お忙しい中をそれぞれ懇切に多くのことを教えていただいた。

ここには(株)満江紅の大山氏の話をもとめ、掲載させていただいた。もとより、他の書店においても、また大山氏の話しでも、いろいろな問題に話しは及んだ。紙幅の制約もあり、その時の内容の一部をまとめたものであることをおことわりしておきたい。

“現代化”へむかう中国

——中国研究所友好訪中団報告会

I. 社会科学研究の動向

——中国社会科学院を訪問して

斎藤秋男

II. 大学改革の現状と問題点

——北京・清華大、上海・復旦大を中心に

石田米子 春名 徹

米その他、市川博所員が林県・東方紅小学校、上海普陀少年宮など子供の問題について話題提供。同団は3月22日～4月7日訪中。

<日時> 5月8日(月) 午後5時半～8時半

<場所> 市ヶ谷・私学会館 (会場費300円)